日本文学研究資料叢書

吉本隆明・江藤淳

有精堂

日本文学研究資料叢書

吉本隆明・江藤淳

日本文学研究資料刊行会編

有精堂

日本文学研究資料叢書

吉本隆明・江藤　淳

定価 2,800 円

昭和55年11月10日　発　行

編　者　日本文学研究資料刊行会

発行者　有精堂出版株式会社
代表者　山　崎　誠

101　東京都千代田区神田神保町1—39
発行所　有精堂出版株式会社
電話　03(291)1521～3 番
振替口座　東京 9—40684

海外印刷　3395—550672—8610

目次

吉本隆明

〔座談会〕吉本隆明の詩と現実 …… 藤田省三 橋川文三 宗左近 … 一

転向論の展望——吉本隆明・花田清輝—— …… 鶴見俊輔 … 二

丸山真男批判の新展開——吉本隆明氏の論文を中心に—— …… 橋川文三 … 三五

吉本隆明私論——「マチウ書試論」まで—— …… 鮎川信夫 … 五九

吉本隆明の詩 …… 清岡卓行 … 四三

心理を超えたものの影——小林秀雄と吉本隆明—— …… 柄谷行人 … 六七

吉本隆明とその時代 …… 笠原芳光 … 八四

表出論の〈ずれ〉 …… 亀井秀雄 … 九三

科学者として見た〝文学〟世界のイメージ ——吉本隆明の中の科学者—— …… 奥野健男 … 一〇三

『マチウ書試論』ノート …… 藤瀬広純 … 一〇七

思想の位置について——吉本隆明試論——……吉田　裕…二八
吉本隆明論……篠田浩一郎…二四一
主体意識の「自立」と「分裂」……川本三郎…一五〇

江藤　淳

「夏目漱石」——その方法と野心について——……水谷昭夫…一六三
近代文学の殺戮に抗す——江藤淳の最近の所論にふれて——……西田　勝…一六七
江藤淳は転向したのか……日沼倫太郎…一七四
江藤淳の転向……芹沢俊介…一七九
或いは死とかがやき……田中英道…一九五
「成熟と喪失」について……上総英郎…二一〇
江藤淳論——「死」と「現実」の間——……磯田光一…二一〇
江藤淳論——不在の超克——……松井宏文…二三四
江藤淳と戦後批評……菊田　均…二四九
江藤淳のこと……埴谷雄高…二五九
「無條件降伏」論争と文学——事実問題を中心に——……磯田光一…二七一
戦後と文学の問題——「江藤・本多論争」によせて——……吉田傑俊…二七八

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

江藤淳論の現在――月村敏行「江藤淳論」を読む――……菊田　均…二六七
〈生の狡猾〉――江藤淳について――……栗坪良樹…二九五
＊
吉本・江藤における土着と近代――その原初について――……高野斗志美…二九九
＊
解　説
吉本隆明論概説……日高昭二…三〇四
江藤　淳論概説……小野寺　凡…三一〇
吉本隆明研究参考文献……日高昭二…三一九
江藤　淳研究参考文献……小野寺　凡…三二

〔座談会〕吉本隆明の詩と現実

藤田省三
橋川文三
宗左近
江原順

詩のもつ社会的意味／無意味
ビジョンで現実を断ち割る
能動的ニヒリズムと切迫感
思想の原始性に生きる剛球投手
吉本隆明と全学連
絶対懐疑と絶対確信の交替
分離意識と革命意識
吉本隆明は現代詩の出発点

詩のもつ社会的意味／無意味

藤田　「現代詩手帖」に連載している「詩人論序説」で、吉本はマヤコーフスキイの批判（昨年十二月号）を書いている。これはわりにおもしろい。マヤコーフスキイなんかの考え方で行くと、詩は現実的ななんかの課題を解決する力を持っている、そういう現実社会の要請に答えて生み出されるものが詩である、ということになる。つまり実生活上の課題解決の一つの手段に詩がなるということですが、そういう議論を吉本はたたいて、こういう議論の仕方の底には詩の中で政治的であろうとし、現実の社会の中で詩的に生活したいという倒錯した心情があるというんです。これは詩人の中にかなり多いんじゃないか。とくに日本で詩を愛好する人達は、詩の中で政治的であったり、現実生活を詩的に、つまりロマンチックに生きようという考えで詩をやっている人が多いと思う。吉本の議論はそうじゃなくて、現実と切れるから詩が生まれるんだという意見でしょう。これには当り前のことだけど賛成です。だから「火の秋の物語」という彼の詩の中には、「ぼくたちの分離性の意志が壁にまみれて、労働は無言であり刑罰である。未来のことがなに一つ見えない時、ぼくたちの労働は強いられた墓掘りである。疲労の他にぼくたちを確かめる手段はない」とある。これは、かなりよく判る。彼が今やっている仕事はほとんどこれだ。墓掘りだけやって、未来のことが何にもいえないからね。自分がくたびれ果てるまで、人をぶったたいてね。それが彼の分離性の意志の表われなんでしょう。

橋川　非常に要領よく吉本隆明論をやったと思うけれども。（笑）詩の中に生活を生活の中に詩を、そういう倒錯をたたく精神は、ある意味では丸山真男や鶴見俊輔の仕事の中で生かされて、一つの系譜をつくっているわけだ。理論と実践の性急な癒着の思想とか、政

治性の優位とかを含めてね。それを吉本は通っていない。通らないで、戦争を彼がくぐり抜けることによって、そういう思想というか、芸術論に到達しているということ。それがまずおもしろいんじゃないのか。

藤田　ぼくは詩の持っている社会的意味或は無意味というものをいろいろ考えているんですが、アメリカやイギリスの若い層に表われているのは、二つの世界の対抗、ソビエトとアメリカの斗争とか論争とかが非常に愚劣に見え、その愚劣な対立の間にはさまってわれわれが生きるのはもうイメージの世界でしかあり得ないと、閉じこもって一歩も外に出ないで少しも読まれない雑誌を自分たちが作ってそこに詩を書きつらねながら生活している。そういう手段として詩が生れている。現実の相対立する世界そのものにトータルに対立して生きよう。そういう生き方が世界共通にできているんだね。これに近いものは日本でもできている。国鉄やいろんな職場の中の詩運動、そういうところで一ぱい出ているんです。学者にもなれないし、専門家じゃない。そういう人達が不満のスピリットの表現武器として詩を書いているんです。これはある意味では、ある意味でだよ、スピリットの表現の新しい形式になるんじゃないかと思う。ヨーロッパでは、今まで詩は高度のテクニックを必要とするものであった、ヨーロッパ語でね。今でもやはりそうかも知れない、韻律が厳しいから。ところが、日本の言葉はナヨナヨしてて、詩にならない言葉でしょう。半分詩で半分散文みたいな言葉だね。だから却て一ぱんいいんじゃないか、素人のスピリットを表現するには。

宗　江原さん、詩の中に政治を、政治の中に詩をという考え方をどう思いますか。

江原　ぼくは吉本の立場は賛成です。しかし今橋川さんがいわれたように、戦争をくぐり抜けるだけでそうなったというより、吉本の場合には宮本顕治の政治の優位ということが出発点になっているんじゃないかな。プロレタリヤ文学あるいはプロレタリヤ詩運動のアンチテーゼという点では、非常に高く評価するんです。けれども、こういう分離の思想は変な形だけど小林秀雄にもあったんじゃないか。吉本は、こういった分離派からの分離をどうするのか、そのあたりがまだ疑問なんです。

ビジョンで現実を断ち割る

藤田　吉本が、分離の感覚を表現するのはいい。しかしそれはビジョンの世界であればいいのであってね。ビジョンにおける分離意志あるいは分離感覚を、吉本は現実の状況の判断の中に持ち込んでくるんです。吉本にはそれが分離されていない。ゴシャンゴシャンなんだ。つまりビジョンで強引に現実を断ち割ることに彼の真価があるのかも知れないが、同時に彼のものの判らなさもある。全学連しか判らないんだから、要するに。（笑）なぜ共感するかというと、全学連は教条によって現実を強引に割り切るでしょう。吉本はビジョンによって強引に現実を割り切って行く。そこに内面的関連性があるように思うんだ。彼と全学連と非常にシンパシーを持っているでしょう。リアリズムの喪失なんですよ。それに憧がれているんだ。彼は孤立したい、何とかしてリアリズムを喪失したいと願っているところが、どこか奥の方にあるんじゃないかな。

橋川　しかしそういうところに彼の、歴史の中の構想力というか、リアリティーのつかみ方があるんじゃないか。

藤田　そうですか。

江原　ぼくもその点は疑問なんだ。

橋川　たとえば江藤淳なんかが、吉本の戦争体験論、あるいは戦争責任論を、不毛だといっている。吉本自身もある意味ではそれを知りすぎている。非常に明確に知っていると思うんだよ。それとさっきの分離意識の過剰というのかな、そういうものとはもちろん関連があると思う。彼のめざしているものは、ぼくは非常によく判るんだけれど……。

藤田　ぼくも判る。とてもよく判る。けれども、つまりどこで何を分離するかをもっと考えないと。なんでもかんでも分離したら、逆に分離できなくなるわけだよ。その証拠に像と現実が分離できてない。

橋川　藤田先生なんかも昔から分離主義だと思うけど、どうちがうのかな。

藤田　ぼくは分離よ。ビジョンとリアリティとか、リアリティとアクチュアリティとか、感覚とビジョンとか、そういうものを分離した上でないと困る、とぼくはしばしばいう。しかし吉本は感覚的分離意志が非常にオーバーだから、それから出てきたビジョンによって、全部を掩おうとするんだ。逆にビジョントータリズムになる可能性がある。その意味では分離できないんです。

橋川　彼は全学連に対しても無条件に共感しているんでも何でもない。それこそ非常な分離のエネルギーが彼の中に働いていると思うな。そういうことを含めて、要するに五九年から六〇年にかけての吉本という詩人の生き方というものは、やはり奥底でははっきり計画されていると思うな。具体的に非常に困る？

藤田　困る場合もあるな。

宗　どういう場合ですか。

藤田　たとえば「中央公論」の巻頭論文です。たとえば第一次大戦の戦後の人間たちが、安全保障条約の改訂は戦争をよび起すからいけないんだ、という宣言を出す。そういうことは全部だめだ、ということを吉本はいうわけです。安保条約こそ国内政治と密接にむすびついているのだから日本の資本主義が安保を必要とするのは当然だ、国内政治のためにはそれをやらなければならないわけですよ。そんなことはしかしね、知っているんだ。知ってるということを吉本が判らないことはないはずなんです。その上でのタクティックスの意味を問題にしているんでね。そのタクティックスを持っている戦後派の違いを分離しないでいうのはおかしい。それから言葉じりでつまんないが、第一行から、「この国家独占の社会においては」なんて言葉が出てくる。何を国家が独占しているんですか。国家が権力を独占しているのは大昔からで、何もいまどき始ったことじゃない。ああいう用語の一人よがりね。それと同じことがほうぼうに出てくる。かってに敵を自分どおりの型にハメ込んでブッタ斬るんだ。もっと自分の力をもってしてもブッタ斬れないような敵を作ってこっちが倒れる、という姿勢のほうがぼくは好きだね。なぜ倒れやすいような敵を作っておいて、ガーッとたたくんですか。だめだよ、敵を壮大化しないと。

橋川　彼が非常に壮大な敵を想定するから全学連に傾倒し、従って戦後派を否定して……

能動的ニヒリズムと切迫感

藤田　つまり神のごとき敵のみが敵だと思っているんだ。したがって具体的には人間の敵が全部矮小化されるんです。そうじゃないんだ、具体的な人間が大きいんですよ。彼はアブソルティストなんだ。だから彼の詩には虚無の感じがある。いいんだよ、それは。だけれども彼の虚無は能動的虚無だ。人をサーッと斬ったら全面的に

相手が倒れることを信ずる。そういうニヒリズム。

橋川　「ぼくがたおれたらひとつの直接性がたおれる」という詩句があるでしょう。それを裏返しすればあなたのいったニヒリズムになるが、やはり彼のニヒリズムは、戦争という体験の持つ意味の、超越的解釈みたいなものがあるということに帰着するわけだ。ぼくは戦争を吉本的にとらえたら、現在の吉本にならざるを得ないと思うな。

藤田　ぼくは生き方としては吉本隆明に賛成なんだ、ほとんど。しかし書き方としては今度の中央公論の論文なんかに対してはほとんど反対なんです。

宗　打ち勝ち難いような敵ということですが、藤田さんなんかどう思うの、敵のイメージは。

藤田　究極的な敵という意味ですか。

宗　いや、こっちが斗ってやぶれるほかないような、そういうものをイメージとして、斗うんなら非常に賛成だといったでしょう？

藤田　そうじゃなくて、神のごとき、絶対的な敵はあるんですよ、ぼくにだってある。しかしぼくらは日常の中で喧嘩してるでしょう？　論争するとかしてさ。論争するなら、相手を立派なものにしておいてからやった方がいいというんですよ。簡単にきれるような相手を作って斬ってみても、それこそはかないものではないか？

橋川　そんなに吉本が矮小化しているかな。鶴見俊輔さんも、吉本の論争はほんとうに困ると専ら困っているらしいんだが、つまり論争によって敵が倒れるくらいに思っている、君のいわゆるアブソルティズムだな、あれが困る。鶴見さんにいわせれば、論争なんかでやっつけたって倒れるものじゃない、なんか一つの具体的な思想家なり文学者がね。しかし倒れると吉本が果して思っているかどうか。

宗　倒れるとは思ってないでしょう、吉本は。

藤田　しかし実に、世界を動かすようなものを書く。（笑）おれごときが足を上げても、ウジ虫一匹動きはしないと思っているにちがいない筈なのにね。切迫感過剰でしょう、彼の詩は。好きだけれど、まあ過剰だなあ。

橋川　だからまあ、ひるがえって大江健三郎とか石原慎太郎に対する、ああいう敵意と共感が出てくるわけね。あの切迫感が好きなんだから。

宗　逆にいって、今の詩には切迫感が非常に足りないですけれどもね。むしろ相対的安定期のモヤやなんかに巻き込まれた詩が多いわけです。

藤田　しかし日本の思想史を辿れば、日本の伝統的な考え方からすれば、切迫感は大体過剰ですよ。これはあたり前のことで、神がいないことと関係するがね。普遍妥当なイデーがあれば、日常の中にイデーがつねに実現されつつあらねばならぬでしょう。したがってイデーに対して絶対的なものに対して余裕がある。日常的に接触するんです。ところが日本の理想主義の場合はそうじゃない。時間の中に絶対を設定するでしょう。つねにそれにむけてあらゆる日常行動を設定して行きますからね。それは凄いですよ。その瞬間が迫ってくると。

橋川　危機感、切迫感を一ばん濃厚に代表する詩人はほかに誰がいるわけですか。

宗　しばらく前ですが、いわゆる荒地派が切迫感の代表者みたいな顔していたし、そう受けとられていたが、あれは社会とか歴史を抜きにした切迫感という感じがしますね。

藤田　社会を抜きにした？

宗　うん。非常に広い意味での社会はあるかも知れないが、社会に働きかける能動的なところはぜんぜんない。吉本と逆の、消極的ニヒリズムという感じがして、ぼく自身はきらいです。

江原　ぼくもそう思うね。好ききらいは何だけれども、それはそう思いますよ。

藤田　江原順などというのは、手を上げようと逆立しようと、ウジ虫一匹動かないと思っているね。

江原　おれは頑固にそう思っているな。だからおれ、不思議でしょうがないんだ。ああいうのは。一たいどこから……。

宗　藤田さん自身が、手を上げても藤田さん自身が動かないの？

藤田　うん、動かない。一生懸命動いてみるんだけれども現代のピエロでね。一生懸命動いてもさっぱり動いてないね。

江原　どんなに飛び上っても地上一尺だっていうわけね。

橋川　ちょっとした詩じゃないの。（笑）

藤田　「道化師の死」という探偵小説があるね。道化師の死だよ。日々刻々再生する道化師なんです。

宗　しかしウジ虫一匹たりとも動かさなければならないという谷川雁のような人が一方にはいるでしょう。谷川についてはどう？

藤田　谷川のほうが余裕があるでしょう、精神にね。遊んでますよ。真摯の顔して遊ぶところがあるね。シンシアリティと遊びとは、不可分一体のところがある。あれはおもしろいよ。

宗　橋川なんかどうかな、谷川は。

橋川　うん、ぼくは……彼自身がいつかいっていたが、縁がないと思ったら判らないとか難解とかいうな、というんだが、ぼくは縁があったかも知れないけど、まあ警戒したいね。まだ吉本のほうが…

藤田　ぼくは吉本の詩はおもしろいんです。生き方としては賛成なんです。

思想の原始性に生きる剛球投手

宗　吉本がおもしろいというのを、もう少しいったらどうなの？

橋川　どういったらいいのかな……。

藤田　書くものにフィクションがないね。現実から離れているというけれども、フィクションがないんだ。腹の底にある憎悪、それをタタキ出すのが詩であり文章だと思っているのね。

宗　そういう点では剛球ピッチャーだな。

藤田　うん、まっ直なんだ。

橋川　彼は詩人としてもそうだし、人間としてもそうだと思うけれども、一つの思想とか、素材とか、技術的伝統とかがなくても、一人で人間は生まれ得るということ、そういう意味での思想の原始性みたいなものを表わしているところがおもしろいんだ。

藤田　それは明らかにそうですね。

橋川　詩というものはそうでね。特別な抽出しから引っぱり出してこなくても、詩というものはレッキと生れ得るという感じがあるだろう。

藤田　だから橋川さんね。結びつくわけですよ。社会的運動としての詩運動、非専門家の思想表現の舞台としての詩というものと吉本は結びつくんです。ウルメンシュ（原人）でしょう。原人としての思想は詩によって表現できるというわけで、ウルメンシュリッヒカイト（原人性）に対する信仰がある。だから若い人に若い人にと加担するんだ。いろんな道筋を経た練達の大人でない、生れたてのホヤホヤの赤ん坊性が残っているような、ウルメンシュ的なもの、ウ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

ルメンシュ的なものにと加担するから、全学連と戦中派と比べれば全学連に、アプレとアバンと比べればアプレに加担する傾きがあるんじゃないの。

橋川　そうかな。いわゆるアマチュア詩人、職場詩人なんかの集った席上での彼の発言をきいていると、むしろそういうウルメンシュ的発想の否定をじゅんじゅんと説いているようだけど……。

藤田　しかし職場詩人というのはウルメンシュじゃないからね。垢に汚れているからね。それは全学連のほうが垢に汚れていないですよ。職場の詩運動が、もしいい思想発表の舞台であり得るとすれば、それはウルメンシュとして自分を発表する場合でしょうが……

宗　職場の詩運動はウルメンシュに帰る運動じゃない。むしろなんか垢に汚れたうえでしゃべる。そういう傾向があるからじゃないか。

藤田　そうでしょう。ロマンを生活の中に求める傾向がある限り成功しない。それは吉本のいうとおりでしょう。

吉本隆明と全学連

橋川　吉本と全学連との話は、吉本を論ずる時に必ず出てくるテーマになっちゃったね。ちょっと詩の問題とは関係ないかも知れないが、全学連の唐牛委員長が、「朝日ジャーナル」にエッセイを書いていた。ちょうどぼくはドストエフスキイの「悪霊」を読んでいたんだ。つまり一八六〇年代のロシヤ、その地方都市にあいまいな奇怪な革命状況みたいなものがピョートルによって持ち込まれる。何もないのに、ないものがあるように出ているわけだ。ピョートルが「われわれは混乱をひきおこすんだ」という、唐牛もそういうんだね。唐牛のをピョートルにはめるとはまるんだよ。それは非常に奇妙な感じがしたけどね。

宗　しかし全学連はとにかく組織があるけれども、ピョートルは組織ともいわれないような五人か六人のある革命モードの中に生きている奴しかないわけだろう。全学連の動きの背後には、そういう一種の革命的モード、たんなる思想的モードじゃなくてね、もっとひどい波があるわけだろう？　そういう違いはあるんだよね。

藤田　吉本の場合には、つねにウルメンシュとして自分の思想を発表するあまりに、ウルメンシュでない自分のものをも、ウルメンシュのものであると錯覚しているところがあるんだ。だからさっきのようなマルクス主義の用語が、どんどん飛び出して行くでしょう。

橋川　だって彼の論文を経済学や社会科学的分析と読むやつはいるのかな。

藤田　世界における少数者の運動がおこるかも知れないと思うんだよ、知識の世界では。つまりウィリアムブレークじゃないけれども、自分が何かを書くのは未だ真実を知らぬ人に真実を与えるためではない。すでに真実を知ってる人を力づけ、その人たちを連帯性にひき込むために書くんだということね。リースマンがそうでしょう。イギリスにも少数者でまとまって行く傾向があるんです。

絶対懐疑と絶対確信の交替

橋川　さっきいったけど、ピョートルが、われわれに必要なのは混乱だ、っていうんだな。全学連も混乱だっていう。現代詩はどうなのかな。

宗　どうでしょうね、われわれに必要なのは混乱だっていう意識は、わりあいうすいんじゃないかな。やはり混乱意識とか、暴動意識、言行の上での暴動意識はしばらくおさまって、砂ぼこりが立た

なくなってるような気がする。ある体制の中での、ため息とか、恨みつらみとか、そういう傾きが最近ふえているという気がするね。

江原　そういう点で、一番代表的なのは吉本さんなんかじゃないか。

宗　ぼくは吉本さんに非常に不満なんです。ぼくたちをとりまいている体制について、キバをむいたり頭をぶつけたりする幼い要素が、詩を書く人には必要じゃないか。詩を書く人でなくても、林謙太郎とか中谷宇吉郎とか、ぼくにいわせると非常にけしからんことをいっている。それに対して、日本の論壇がないでしょう。ジャーナリズムの要請かも知れないが、彼らのいうことをわりに見逃しているようなところがあるんです。詩の世界でもそういうことがあるんじゃないか。その点で、吉本さんの闘争的なところが、彼の実作の上であまり見られないからおもしろくないんです。

藤田　実作の上で、出ていますよ。

宗　最近はないですよ。彼自身書いてないしね。

藤田　そうかな。だって今度の中央公論でそれをいってるんですよ。

宗　エッセイストとしてはね。詩の実作の上では出してないですよ。

藤田　吉本のように詩を書けという……。

宗　そういうわけです。

江原　あれは他者の意識があまりないんだろう？

藤田　詩には少くとも強く出てないよね。おれは一体おれであろうか、という意識ね。つまり火の玉一心になって飛びかかれ、という、ね。（笑）

宗　よくいえば古武士の風格があるわけだ。

藤田　古武士ってなんですか。

宗　古き武士。

藤田　戦国武士は違いますよ。隠密全盛ですよ。

江原　考えてみると、詩人の仲間には一般的にないよ、他者の意識は。最近とくにそう思う。それで結構新しくてとおって行くんです。これは実に不思議だ。岩田宏君の詩なんかとくにそうです。ないことの典型ですよ。ないことでもっている詩人でしょうね。吉本君もどうもそうだと思う。ほかの絵描きとか、小説書きとか、批評をやっている人と比べてみると、ないことでもつへんな部落だと思うんだ。

宗　しかし現代詩における他者の意識、今までどんな人があったかな、日本の場合。

江原　さあ大変だな。

宗　わりあいない。わりあいっていうより、ほとんどないんじゃないの。

藤田　それと吉本の場合とは、ちょっと区別しなければならないんじゃないの。彼の詩はおれというものをぐっとみつめている詩でね。おれである自分とおれでない自分と、つねに二ついる、というのが君の他者の意識だろう？　吉本の場合はそうじゃない。絶対者だからね、彼は。つねに絶対的に自分を懐疑し、同時につねに絶対的に自分を出撃させる。絶対懐疑と絶対確信と、そういうものがずーっと交替して表われているんじゃないの。

宗　江原さんの場合は、めざめてみればラッパであったと、銅がね。ラッパであった。しかしそれは銅の責任ではない。そういう他の意識があるわけだ。

江原　そうです。

橋川　ランボオか。

江原　ランボオって騒ぐけどね。

宗　そういう意味での他者意識は、日本の詩人の中にはないんじゃないの。

江原　ないと思うなあ。西脇順三郎氏あたりから最近までね。

橋川　日本の詩で、他者の意識を強いて探せばどうなるの。

江原　ぼくは、飯島耕一君の「他人の空」にはあると思うんです。

宗　それから吉岡実にもあると思う。

江原　ああ、吉岡にはあります。つまり言葉の多義性から出発するわけですから、あると思うんです。安東次男にもね。

宗　自分の発見したものが逆に自分を圧倒したり恐れさせたりする、それは吉岡実が一ばんじゃないかという気がするんですがね。

江原　篠田一士の解説だと、そういうことを見逃がしていますね。

宗　日本の伝統では、他者の意識を抑圧して、自分のユニティというか、統一体を作ろうという傾向じゃないですか。例えば戦争責任なんかもそうですけれども。

江原　だからさっき藤田のいっていた、自分が世界を引っくり返すというようなエモーションがね、どこから出て来るのかさっぱり見当がつかないんだ。詩人がそんなこと思いこんでるとしたら、不当な気がするんだよ。

藤田　それともう一つ、戦争体験だ。

分離意識と革命意識

江原　だから分離もなにもしてやしない。ぴったり行ってるんだ。そういうことで、吉本君の分離体験には非常に疑問がある。吉本の、君のいう分離の意識というのを、自分に即していえば、なんていうかな……、

藤田　つまり吉本の分離の意志は、既成の秩序をトータルに否定せねばならぬ、その歴史からの解放なんだよ。

江原　だから非常に歴史的なんだ、見方がね。おそらく詩の作品より詩論を書く人だと思うんですね。

藤田　歴史をトータルに否定するから、ウルメンシュに帰るわけなんだよ。

橋川　こういうことはどうなの？　他者の意識というけれども、人間が分離する必要があるのは、さまざまな局面があるけれど一ぺんコッキリじゃないのか。たとえば神から分離し、たとえば絶対的な秩序から分離しちゃう。あと人間の内部で分離の問題がおこってくるのは、それをとおってからでね。まず絶対から切れないで、どうして人間の内部に他者の関係が成立するか。まず絶対が切れてないから、吉本ががんがんいって切れよう切れようと……。その他者の意識というのはどうかな。

藤田　それは判る。判るんだけれども、日本は歴史的に重畳的な国でしょう。だからいろんな役割を果さなければならないんです、インテリゲンチャは。それは過大になる。（笑）だから吉本氏みたいに絶対を作ってアブソルチストとして行動すれば、日本に徹底的に欠けているものがはじめて生まれる。だいたいぼくは賛成だけれども、それだけでいったら今あるリベラルの考え方なんかが全部なくなっちゃう。断種の方法なんだ。その犠牲を払ってもいいと考えているんです、要するに。しかしそれほど社会的要請にばかり答えて詩を作る必要もないではないか。日本の革命戦略に従って詩を作らなくてもいいよ。

橋川　ただしその革命戦略は、日本共産党のいってるものじゃな

く、吉本のイメージだからね。

藤田　もちろんそう。ぼくが普遍者だとか絶対者だとかいうことをいって、文章を書いてきたのとほとんど同じなんです。その点では非常に共感する、意図の点では。しかしぼくは同時にレラティヴィズムの方をも否定したくはないんです。

橋川　しかし吉本は、そういうことを考えてないとは思わないね。そういう仕事は、たとえば藤田君がやってくれということじゃないの、要するに。実作の立場からいったって幾種類もの詩を書けるわけじゃないんだから。

吉本隆明は現代詩の出発点

藤田　カーの「ロシヤ革命」というのは実によくできている。おもしろいね。「いかなる革命理論家がかつて述べたものを見ても、たいてい革命によって、歴史がまったく遮断されたと書いてあるし、革命イデオローグもそういっているし、革命史家然り、しかしかつて一度もそうあったことはない。革命史家が語るほど革命というのは遮断的な要素において多くはない」と力説してね。革命以後においてロシヤの思想的伝統がいかに生きているかということをおもんばかるんだ。吉本は遮断できることを疑ってはならんぞ、ということなんだ。(笑)

橋川　それは判るよ、けれどもヨーロッパやロシヤの革命の場合にそういうことがいえるということでね。一九四〇年代の日本に起った諸事件の意味の中に吉本が遮断できるという発想の根拠があるような気もする。

藤田　まあ日本では、遮断したことがないからね、一度も。従ってその一度をやりましょうという、その一度に自らを賭けていることはたいしたものだと思う。立派なことだよ。吉本の一度に賭けるという革命的意志に非常に尊敬しながら、なぜケチをつけたかというと、東京新聞の論壇時評で田口富久治君が「吉本君の今度の中央公論の論文、非常にいい。賛成だ。」と書いているからだ。そこまではいい。そのあとで、「なぜならば、社会についての総体、社会の総体についてのビジョンを思いえがくことから、すべての判断が出発するということは、科学の公理だから」とある。違うんだよ。科学は全体的なビジョンと峻厳に分離されなければならないんですよ。吉本はトータリズムだから、従ってそこから革命的意志も出て来るけれども、しかし科学の名においてこれに賛成するんではね。科学はついに未成立に終るんだ。科学というのはそういうものじゃないんだ。部分に限定する意志のほうが科学的なんだ。そういう科学者がいるんだからね。ぼくは吉本には生き方の上では賛成するが、科学の上では賛成しちゃいけないんだ。なぜならば、科学じゃないんだから。吉本は科学じゃないことをまたねらってもいるでしょう。

橋川　吉本はアブソルティズムだということが出たけれど、一がいにアブソルティズムじゃないと思うんだ。自分のことを疑ってないとか、そんなことは……。

藤田　絶対的に懐疑してるというんだ。絶対的に懐疑してるから、絶対的に確信してるというんだよ。「疲労によっておれはある」と思うんだ。そうでしょう。

橋川　だからさ、そういうあれが現代詩の出発点になるわけか。

藤田　出発点だね。その意味では吉本というのは立派だよ。

橋川　彼の詩集の巻頭に写真がのっかってるけれど、奈良の大仏の時代、聖徳太子か……あれに似てるね。きっとあのあたりから、疲

労したあれですよ、大陸あたりから来た職人だったわけだよ。

藤田　アメリカを建国したピューリタンが、マサチューセッツ州でカルバンを出発点にしたんだけれども、出発点以上のものにはしなかったというんだね。カルバン的なんだよ吉本隆明は。

宗　じゃあ、このへんで……。

（「現代詩手帖」昭和三五年八月号）

転向論の展望

――吉本隆明・花田清輝――

鶴見俊輔

一、戦後転向と戦後転向論
二、戦後転向論と戦前転向論

一、戦後転向と戦後転向論

この共同研究が進むのとならんで吉本隆明の転向論が進んで来た。まったく連絡なく別の場所からあらわれたこのもう一つの転向研究について、考えてみたい。吉本の仕事を、転向論にかぎってとらえてみよう。吉本隆明とその論争の相手となった花田清輝との対立も、転向に対する二人の切りこみ方のちがいという点だけにかぎって、考えてみる。

吉本隆明（一九二四――）は、大正十三年十一月東京で生まれた。父方の祖父は、九州天草で小さな造船所を経営する舟大工の棟梁であった。米沢の高等工業学校をへて、東京工業大学に入学。東京工大で数学をおしえていた遠山啓の強い影響をうけ、科学方法論をとおして唯物論に接近した。東京工大ではおなじく学生の奥野健男と知り、「大岡山文学」という同人雑誌に詩と評論を書きはじめた。一九四七年（昭和二十二年）九月東京工大化学科を卒業。大学院研究生の生活をへて東洋インキ株式会社に就職。ストライキに敗れ、退職。その後、長井・江崎特許事務所に入り、現在に至った。一九五四年（昭和二十九年）以来詩を『荒地』に、エッセイを「現代評論」に書く。一九五八年（昭和三十三年）に、武井昭夫、奥野健男らとともに同人雑誌「現代批評」をはじめた。一九六〇年（昭和三十五年）六月十五日、六月行動委員会のメンバーとして全学連主流派の学生たちのあいだにおり、警官隊の襲撃をうけてとらえられた。十八日釈放。著書として、『文学者の戦争責任』（武井昭夫と共著、一九五六年）、『高村光太郎』（一九五七年）、『吉本隆明詩集』（一九五八年）、『芸術的抵抗と挫折』（一九五九年）、『抒情の論理』（一九五九年）、『異端と正系』（一九六〇年）がある。

吉本隆明が転向を問題にしはじめた動機は、彼の敗戦の迎え方の中にある。敗戦の日までに彼は敗戦の予感をもたなかったわけではないが、敗けにおわるとしてもこの日本のたたかい方の中に意味をみとめて来た。吉本は自分の生活に影響をあたえた三つの本として、中学生の時によんだファーブルの『昆虫記』、敗戦直後工大生としてよんだ『新約聖書』、さらにその後によんだマルクスの『資

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com